が，それぞれの問題関心はけっして狭い専門領域に留まるものではない．研究成果のエッセンスがコンパクトにまとめられているので，近世から近代初期にかけての日本における，医を含む人びとの生活の諸相に興味をもつ一般の読書人も手に取りやすい一冊となっている．もちろん，それぞれ別々の事象，別々の地域についての研究の成果をコンパクトにまとめた論集であるので，タイトルにある「近世日本の貧困と医療」の総体像が，本書から直ちに浮かび上がるわけではない．しかし本書に収められている地域事例は，他の地域はどうだったのだろうという想像力をかき立てる．

また，とくに第1章と第2章では，イングランドをはじめとするヨーロッパにかんする研究動向も意識されており，外国史・比較史に関心がある読者も，知的刺激を受けることができるであろう．それぞれの時代・場所において，人びとをとりまく世帯，地域社会，市場，公権力などの領域がどのように交差し，医療が必要なときや貧困に陥ったとき，自助，相互扶助，公助などがどのように構成されていたか，人びとにどのような選択肢があったのか／なかったのかを問うことは，いま世界史的にも重要となっている．本書には，近世日本についてそれらを考える糸口がいろいろ含まれている．

（永島　剛）

［古今書院，〒113-0021東京都文京区本駒込5-16-3，TEL. 03（5834）2874，2019年2月，A5判，112頁，3,800円＋税］

岡田靖雄 編著
『もうひとつの戦場――戦争のなかの精神障害者／市民――』

本書の編著者である岡田靖雄氏の歴史探求を方向づけたのが，1958年にだされた立津政順の論文「戦争中の松沢病院入院患者死亡率」との出会いだったという．かけだしの医師だった岡田氏は，東京都立松沢病院で男子部医長だった立津のすすめで「不潔病棟」と通称されていた男子病棟を（通常は1年交代であったのを自ら希望して）4年間も担当する一方，当病院に長らく在職していた病棟主任の「北さん」（北島治雄看護長）が語る戦前からの病院の歴史に熱心に耳を傾けた．「北さん」の語りは，やがて「癒えざる者の声」として1960年に出された『日本残酷物語』に所収される．これが岡田氏による精神科の歴史記述の最初のものだった．1964年3月の精神障害者によるライシャワー大使刺傷事件から間もない時期に出版された，岡田氏編著の『精神医療―精神病はなおせる―』（第1版，1964年7月）には，「われわれは戦中戦後について語るべきあまりにも多くのことがあるのを知っているが，いまはそういう悔恨の苦しみをのりこえて，現実に今日の時点で精神病のために何をなすべきかについて語ることをいそがねばならない」（同書第4版，1969年，41頁）という，それからおよそ半世紀後の本書の出版を予告するかのような記述がある．だが，その後，『私説松沢病院史』（1981年）などでも戦争中の病院事情は詳しく書かれたものの，表面からは見えないマグマのような形で岡田氏の内部で渦巻いていただろう「戦時中の精神科医療についての関心」は，地上への噴出口を長い間見いだすことはなく，次のステップへの飛躍に備えて，寡黙な状態を保っていたように思われる．

以上のような意味で，戦争，とりわけ太平洋戦争と精神障害者との関わりは，岡田氏の精神科医療史研究の原点かつ推進力となってきたテーマであるが，本書は数十年間にわたって温存されていたこのテーマを，21世紀になってから徐々に具体的な研究成果として結実させ，現時点までに刊行された論文などを基盤にしてまとめられたものである．

本書の構成を簡単に説明したい．上記の岡田氏の問題意識などを記した「序説」につづいて，第Ⅰ編「精神障害者の受難」は，第1章「入院患者

の死亡率」と第2章「精神病院でのデング熱実験」から成っている．第Ⅱ編「空襲・戦闘のなかの市民」は，第1章「空襲時精神病―植松七九郎・塩入円祐の資料から」，第2章「塩入円祐・岩佐金次郎による空襲生活調査」，第3章「空襲の精神医学」，第4章「沖縄戦による晩発性のPTSD」，第5章「原子爆弾投下による精神障碍者・市民の被害」の全5章構成である．第Ⅲ編「戦争のなかの精神医学研究」は，第1章「戦場心理の研究―早尾乕雄による日中全面戦争従軍の記録」と第2章「『精神神経学雑誌』における研究主題の変遷」から成り，第Ⅳ編「戦争の周辺で」は，第1章「大阪府立中宮病院と禁野火薬庫爆発」と第2章「大阪脳神経病院事件」という2章から構成されている．「付録」は，第1章「『大東亜雑記』抄」と第2章「占領下五月祭の原子爆弾症展」を，2段組で収録している．最後に「死から目をそむけるな―あとがき」で結ばれている．なお，第Ⅱ編「空襲・戦闘のなかの市民」の第3章，第4章，第5章は，順に野田正彰氏，蟻塚亮二氏，中澤正夫氏からの寄稿であるが，それ以外は岡田氏の執筆によるもので，その「原型は，精神医学史学会および15年戦争と日本の医学医療研究会で報告し，ついで『15年戦争と日本の医学医療研究会会誌』にのせたものである」（本書219頁からの引用）．

さて，本書の内容は太平洋戦争に関わる精神障害者問題の広範にわたり，紙面が限られたこの書評では上記の数々の章タイトル以上の詳細に踏み込むことは難しい．各章の記述は，精神医療史的にはこれまでほとんど注目されてこなかった新事実（たとえば禁野火薬庫爆発事件）を含むという点で資料的な価値が高いとともに，戦時体験によるPTSD症例の検討といった現在にも引き継がれている課題をも扱っている．こうした，豊富なデータに支えられた現象記述的な部分が本書の根幹をなすものだが，もうひとつ重要なことは各章の記述に通底しているアカデミズムへの批判である．それは，戦争中の精神病院でのデング熱実験に見られる「人体実験許容の風潮」，あるいは日中戦争の戦場報告をした早尾乕雄が軍部から受けただろう「上からの圧力」や「検閲」といった，人権や権力に関わる問題の検証作業を曖昧にしてきた日本の学界の歴史と現状への異議申し立てであるに違いない．このような歴史と現状は，岡田氏が「死から目をそむけるな―あとがき」で言及するナチスによるT4作戦（精神障害者の大量殺戮）について，その全容を明らかする努力を今日まで続けている戦後のドイツ人研究者たちの執拗なまでの態度と対比できよう．わが国における，戦争と精神障害者に関わる歴史的な探求はまだ始まったばかり，というべきかもしれない．

（橋本　　明）

［六花出版，〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-28　近藤ビル3F，TEL. 03（3293）8787，2019年7月，A5判，228頁，1,800円＋税］

坂井建雄 編
『医学教育の歴史――古今と東西――』

本学会理事長の坂井建雄氏が編集された『医学教育の歴史　古今と東西』は，同じく同氏の編著となる『日本医学教育史』（東北大学出版会）に続く医学教育史の学術書であり，しかも前著が日本の医学教育史にとどまっていたのに対し，本書は表題のとおり，西洋医学教育史と日本の医学教育史を同時に取り上げるという難事に挑んだ力作である．坂井氏は本書とほぼ同時に関連する医史学書として『図説　医学の歴史』（医学書院）を本書刊行の直後に公刊されており，まさにその研究的なエネルギーは無尽蔵かとすら思わせる．

本書は570ページを越える大著であり，編者の坂井氏を含めて11人の著者が執筆している．本来であればその一つひとつの論考について詳細に評する必要があるだろうが，時代も地域も広い本書の内容を個別に論じることは評者の能力を超え